

びわこの 考湖学

15

この連載の7回目、県内を通る古代の交通路について話をしました。今回はこれに続く時代、平安時代後半ごろから鎌倉時代の交通路と「宿」をみていきたいと思います。

平安時代も後半になると、律令国家と呼ばれる体制から、貴族文化華やかな時代、王朝国家と呼ばれる体制へと変化します。同時に、それまで強力な国家体制によって經營されてきた交通路や駅家が変化し、規模が縮小、あるいは廃絶していききました。

『更級日記』によると、寛仁4(1020)年に上総(千葉県)国司の任期を終えて帰京した菅原孝標一行は、「仮屋を造り設け」、「大きな柿の木の下に庵」を造って旅を続けました。本来、国司の旅は駅家や郡衙(郡役所)に宿泊するにもかかわらず、宿舎になる施設がなくたってしまい、このころにはすでに駅伝制が全く機能していなかったことがわかります。

また、この一行が辿ったコースですが、途中の尾張(愛知県)から東海道を外れ、美濃(岐阜県)を経て近江へ入るといふ東山道のルートをとりました。

藤原定家の娘、阿仏尼が記した『十六夜日記』や『東関紀行』などの鎌倉時代の紀行文にもこのルートがみられ、近江では鈴鹿峠を回避して東山道を経由するルートが中世を通じて一般的になっていきます。ちなみにこのルートですが、現在でもJR東海道本線や東海道新幹線、名神高速道路に踏襲されています。

平安時代末期から鎌倉時代になりますと、交通路上の宿泊施設「宿」が現れます。宿は古代の駅が廃絶した後に民間の宿泊施設として発達したものです。そこで県内の宿の代表として「野路宿」にスポ

中世の交通路



草津付近における鎌倉時代の交通路。野路と守山は中世前半、その中間の草津は中世後半に「宿」が設けられた。いずれも湊からのアクセスが便利な場所にある。

ットをあててみます。

これは草津市野路町あたりに設けられた宿で、鎌倉幕府の事績を記した史書「吾妻鏡」によれば、建久元(1190)年に上洛した源頼朝がここに宿泊しています。記載内容から、野路宿には「御旅館」と呼ぶ門を持った宿泊施設があったことがわかっています。

もう察しがつくと思います。この大型建物は頼朝が宿泊した時期に存在していた可能性が高く、さらに思いを巡らせてみますと、源頼朝が宿泊した「御旅館」であったかもしれません。

最後に野路岡田遺跡の場所をみてみましょう。この遺跡からは古代の東山道とみられる道路跡も発見されていますが、この道路跡は中世に入っても使われていたようです。また、付近には矢橋港と結ぶ「馬道」と呼ばれる古道が最近まで通っていました。この2本の道路が交差する場所に野路宿はあったのです。

つまり、野路宿は東山道(東海道)の陸上交通と、馬道から矢橋港を介して湖上交通のネットワークにつながっているのです。宿を設けるには単に交通路沿いというだけでなく、このような水陸交通に便がよい場所が選ばれたようです。

(滋賀県文化財保護協会 内田保之)

「駅」から「宿」へ 頼朝も滞在